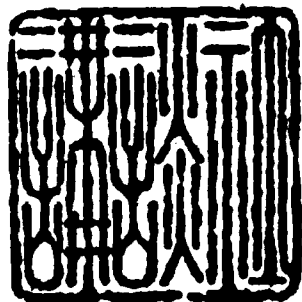


伊藤 整
日本文壇史

硯友社の
時代終る

溝談社

日本文壇史Ⅶ



© 伊藤 整 一九六四

昭和三十九年六月十日 第一刷発行
昭和四十四年十二月五日 第四刷発行

定價五八〇圓

著者 伊藤 整

發行者 東京都文京區音羽二・一二・二二
野間 省一

印刷者 東京都文京區大塚六・一〇・一四
濱田 純治

印刷所 東京都文京區大塚六・一〇・一四
豐國印刷株式會社

(黒柳製本)

東京都文京區音羽二・一二・二二

發行所 株式會社 講談社

振替口座 東京 電話 (042) 一一一一 (大代表)
東京三九三〇 郵便番號 一一三

落丁本・亂丁本はお取りかえ致します。

Printed in Japan

(分)0-3-91(製)105872(出)2253 (1)

は し が き

「日本文壇史」第六巻を出版したのは昭和三十五年の八月である。

それ以後今年まで實に四ヶ年もの間において、續巻なるこの第七巻が上梓されることとなつた。その間しばしば讀者諸氏からの催促を受け、その期待に應へることのできなかつたのを著者は甚だ遺憾とする。

すでに前々巻なる第五巻の刊行される前に著者は七ヶ月ほど日本を留守にしたが、その旅から歸つて第五巻をまとめると間もなく、昭和三十五年の十月から著者はニューヨークのコロンビア大學に赴くこととなり、翌年の六月までそこに滞在した。このやうな長期の留守のあとでは、仕事の調子の恢復も容易でなく、雑誌「群像」に載せる毎月の稿にも追はれがちであつた。

は し が き
昨年の春、本書の刊行事務の擔當が早川徳治君に決まり、同君の鞭撻の下に舊稿の訂正に取りかかつたが、進行意の如くならず、遂にこの一巻をまとめるに年を越さねばならなくなつた。その間に本稿「日本文壇史」全體に對して、昨年の春菊池寛賞が授與され、著者は出版社とともにその光榮に浴することが出来たけれども、そのとき既刊の各巻は在庫品なく、新しき第七巻は進行中であ

つて、遅筆の責の甚だ重いことを痛感した次第であつた。

雑誌「群像」の方は著者の日本に在る間は殆んど休むことなく書き繼がれてゐるので、その回数は昭和三十九年三月號で第百三十一回目に達してゐる。それに較べて書物となつたのは、この第七卷で漸く第六十九回目に達したに過ぎない。年次について言えば、本卷では明治三十七年に達し、「群像」は目下明治四十一年の部分を書き進めてゐる。前途甚だ遼遠の感があるが、著者は今後當分は長期の海外旅行等を避けるつもりである。執筆もできるだけ抑制して、今のところ本稿の外は連載もの一本しか書いてゐない。なほ本年三月をもつて著者は昭和二十四年から勤務して來た東京工業大學の教職を退いたから、多少は時間の餘裕も出来る筈である。

本卷の序文の冒頭を私事で埋めるのは本意でないが、刊行の遅延が重なつた事情と今後の計畫を併せ述べて、讀者諸家の諒解を得たいと思つたのである。

第七卷は、明治三十五年の末、夏目漱石がイギリス滞在を切り上げて歸朝する頃の事情から始まる。三十六年から七年にかけて、日本はロシアとの戦争を始める雰圍氣の高まる中にあり、國家としても多事な時にさしかかるが、文壇においても目まぐるしい變化が起る。

最大の事件は尾崎紅葉の死を頂點として、硯友社と、それに同伴する文學者たちの間に保たれた文壇の情勢が一變することである。紅葉の死を一時代の終末の象徴とすれば、一高の生徒藤村操の

死は、新時代の到來を豫告する朝焼けのやうな輝きを伴ふものであつた。彼の死の周邊に、さまざまな新精神が羽搏きはじめるのである。

紅葉の死と前後して、明治を代表する名優菊五郎と團十郎が世を去る。更に、半年の後に、紅葉の生涯の敵手であつた齋藤綠雨が死ぬ。しかもその直前に、古き和歌の美感を新時代の短歌へと引き繼ぐ役目をした落合直文が世を去り、風狂の文人原抱一庵もまた逝くのである。

日露戦争を期として社會主義者たちは團結を新たににして週刊「平民新聞」を發行し、反戰運動に乗り出すこととなる。このやうな激しい動きは、やがて日露戦争から戦後にかけて起る日本文化の新機運を豫告するかのやうな新しい鼓動が脈うちはじめることを語るかのやうである。

夏目漱石はそのやうな時期に東京に歸り、當時の最もすぐれた青年たちの輪の中に自己の坐を見出したやうなものであつた。

雑誌に發表した本卷の舊稿の諸項目に關して、故前田晁氏をはじめ、吉田精一氏、川田順氏、崎川範行氏から御教示を得たところがあり、本書の中にそれを生かし得たことは著者の幸福として感謝したいことである。

は し が き
なほ、この第七卷をまとめるに當つて、寫眞の編輯その他で早川君の援助を受けること多かつたが、その外、每卷の例になつてゐるやうに、事項、人名、時日等の確認を含んで芳賀義彦氏に嚴密

な校正をお願いし、索引作成には奥野數美氏に當つて頂いた。三氏に併せて厚く御禮を申し上げたい。

一九六四年二月

伊藤 整

寫眞

* 狩野亨吉 夏目漱石 外山正一 井上哲次郎 小泉八雲
島崎藤村と木村熊二（小諸義塾教師時代） 山路愛山

二六〇元

* 泉鏡花と伊藤すゞ 二葉亭四迷（東京外國語學校教授時代）
病床の尾崎紅葉 川上音二郎 川上貞奴 江見水蔭 巖谷小波

一〇四〇一〇五

* 藤村操と華嚴の瀧 安倍能成 寺田寅彦 岩波茂雄
尾崎紅葉の葬儀 正宗白鳥と近松秋江 泉鏡花と徳田秋聲

一五八〇一五九

* 堺利彦 幸徳秋水 西川光二郎 石川三四郎 片山潜 矢野龍溪 荒畑寒村
有島武郎 森本厚吉 森 廣 岡倉天心 永井荷風 野口米次郎

二〇二〇二〇三

* 五代目尾上菊五郎 九代目市川團十郎 石川三四郎 荒畑寒村 堺利彦
落合直文夫妻と與謝野寛 原抱一庵 齋藤綠雨 馬場孤蝶

二五二〇二五三

目次

第一章

明治三十五年、夏目漱石のイギリス滞在末期——漱石の歸朝——狩野亨吉の學問——寺田寅彦が妻を喪ふ——早稻田大學の成立——留學中の島村抱月と高山樗牛の死——小泉八雲が東大を去り、そのあとへ漱石と上田敏が入る

三

第二章

明治三十五年、島崎藤村の小説「舊主人」の發禁——木村熊二と山路愛山と藤村の關係——小山内薫の家庭——小山内と藤村——徳富蘇峰と蘆花の離別

二九

第三章

明治三十五年、鑛毒問題と田中正造の入獄——石川啄木の上京——二葉亭四迷の不安な精神——二葉亭が外國語學校教授を辭任して滿洲へ渡る——北京における二葉亭の生活

五〇

第四章……………七

明治三十六年、小説「黒潮」の出版——蘆花が黒潮社を創立する
——原抱一庵の「聖人乎盜賊乎」——原抱一庵と文士たちの交際

第五章……………九

明治三十五年、紅葉の「二六新報」入社——明治三十六年、小杉天
外の「魔風戀風」の成功——泉鏡花と伊藤すゞの結婚——紅葉の入
院——紅葉が癌の宣告を受ける——紅葉が鏡花とすゞを別れさせる

第六章……………二三

明治三十六年、徳田秋聲の結婚——秋聲と三島霜川との交遊——江
見水蔭と川上音二郎と巖谷小波——荷風と鷗外

第七章……………二三

明治三十六年、漱石が一高、東大の講師となる——教室における漱
石と藤村操——安倍能成と岩波茂雄、藤村操自殺事件とその反響
——正宗白鳥と近松秋江——白鳥の「讀賣」入社

第八章……………一九

明治三十六年、尾崎紅葉の病床の周辺——川上眉山、廣津柳浪の近

第九章

年の仕事——巖谷小波が昔の戀人川田綾子に逢ふ——紅葉の臨終と葬式——田山花袋が新時代の夜明けを感じる

一八四

第十章

明治三十六年、七博士の意見書——日露戦争未來記——社會主義者たちの種々のグループ——社會運動の弾壓——東京の電車開通——日本の戦争準備——荒畑寒村の少年時代

二〇三

第十一章

明治三十六年、二葉亭が北京から歸る——イギリスに於ける島村抱月と野口米次郎——岡倉天心の「東洋の理想」——獨歩が佐々城信子との出逢ひを「鎌倉夫人」に書く——有島武郎の渡米——永井荷風の外遊

二三三

第十二章

明治三十六年、夏目漱石の講義とその神経病——菊五郎と團十郎の死——福地櫻痴の晩年——社會主義者の反戦論と週刊「平民新聞」の誕生——片山潜が日本を去る——木下尚江が「火の柱」を書く

二五三

明治三十六年、馬場孤蝶と齋藤綠雨——齋藤綠雨の晩年——落合直文の晩年——雑誌「なのりそ」と直文の死——明治三十七年、日露戦争始まる——齋藤綠雨の死——原抱一庵死す——小泉八雲死す

参考文献		三〇二
------	-------	-----

索引	
----	--

日本文壇史——硯友社の時代終る

第一章

1

明治三十五年、夏目漱石のイギリス滞在末期——漱石の歸朝——狩野亨吉の學問——寺田寅彦が妻を喪ふ——早稻田大學の成立——留學中の島村抱月と高山樗牛の死——小泉八雲が東大を去り、そのあとへ漱石と上田敏が入る

正岡子規が死んだのは、明治三十五年（一九〇二年）の九月十九日であつた。子規の親友の夏目金之助は、この時、イギリスに留學して滿二年を経てゐた。彼ははじめケンブリッジ大學に學ぼうとしたが、調べて見るとケンブリッジの學生生活は贅澤で、年額四千圓ほどの費用がかかり、夏目が文部省からもらつてゐる留學費用の月額百五十圓ではとてもケンブリッジの大學生生活は送れさうもなかつたので、ロンドン大學に入ることに決心し、そこのユニヴァーシティ・カレッジにしばらく通つた。しかし、面白い講義もなかつたので、その後は、當時の代表的なシェイクスピア學者なるダウデンの友人のクレイグといふ老學者について個人教授を受けるにとどめ、安い下宿に暮しながら生活費を切りつめては本を買ひ、讀書生活を續けた。

ロンドンに住んでみて、夏目金之助はどうしてもイギリスのうつとうしい氣候が好きになれなかった。また西洋人の生活がひどく没趣味なものに思はれ、彼等とともに暮すのが窮屈で、息苦しかった。自分が「英國紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活」をしてゐるやうな氣がした。そのときのロンドンの人口は五百萬であつたが、夏目は「五百萬粒の油のなかに、一滴の水となつて辛うじて露命を繋」いでゐるやうに感じた。彼は「蕎麥を食ひ日本米を食ひ日本服を着て日のあたる縁側に寝ころんで庭でも見る」といふ日本の生活ほどよいものはない、と思つた。

夏目金之助は、東大英文科にゐた時から努力型の學生であり、教師になつてからも、研究にも授業にも熱心であつたが、英語教師としての自分の地位、英文學者としての自分の仕事に本當の満足を感じたことは一度もなかつた。その不満は、時として彼を驅つて教師たる地位を棄てようとまでさせた。しかし彼は、自分が本當は何をやりたいのか、自分の本領が何にあるのか、それが分らなかつた。イギリスにやつて來てそこに住み、英人の文學作品に親しんでゐても、彼は満足しなかつた。この世に生れた以上、本當に自分の満足する何かをしなければいけないのだが、それが分らなかつた。さういふ、生きる上での本質的な迷ひが、ロンドンに住んで、異邦人の間で孤獨な生活をしてゐるうちに、いよいよ鋭く彼を責めさいなむやうになつた。ロンドンの街を歩きまはつてもそ

の疑問は打開されず、下宿屋で本を讀んでゐても、その迷ひが解けない以上、かうしてイギリスにゐるのが無意味のやうに感じられた。

明治三十四年の九月、留學してから一年ほど経つた頃、彼は漸くこの難問を打開するきつかけを見つけた。それは、自己本位の考へ方と味ひ方によつて文學の本質なるものを追求し、把握して見よう、といふことであつた。これまでの、英人の研究のみを追ひかけてゐた彼の研究方法は、自分の食べるものの味を他人の判断によつて決定しようとしてゐるやうなものだつた。それではいつまで経つても満足が得られる譯はないと彼は考へた。とにかく、今後は「自己本位」でものを考へ、自己本位で研究し、判断しよう、と夏目は決心した。「自己本位」の四字が、彼を長年の迷ひから脱出させた。この年夏目金之助は、數へ年で三十五歳になつてゐた。

彼はイギリスに來てから、イギリス人の學者についてシェイクスピアを研究して來たが、自分の實感とイギリス人の實感とがしばしば食ひちがふのが分つた。しかし彼は、日本人として、自分の實感を先づ尊重すべきだと考へた。更にまた文學の鑑賞において、そのやうな食ひちがひが、民族により、個人によつてなぜ起るのか。それを理解するには、文學とは何であるか、その本質を自分の流のやり方で究はめねばならぬ、と彼は思ひ、それを研究の目標にして、「文學論」といふ著述をしようとした。だが、文學作品や文藝評論などによつて文學の本質を捕捉するのは、血で血を